

たね通信

No. 33 2016年

発行 地域生活ケアセンター
小さなたね

【医療法人にのさかクリニック】

どの曲を選びますか？」と尋ねるところ、真つ先に彼の口から出てきたのがこの曲だったといひます。

“Heal the World、(世界を癒そう)”と呼びかける歌詞は、「世界」という壮大なテーマを掲げつつも、“make a little space、(小さなスペースをついで)”、“make



さあ！ 何を描くのかな？

を慰める働きがあるように思います。その存在は、その場に居合わせた一人一人の、その小さな空間をより良くしていく働きをしているのではないのでしょうか。小さなたねは、そんな世界を癒す種に満ちています。

さあ、みんなで傷ついた世界を癒していきましょう。

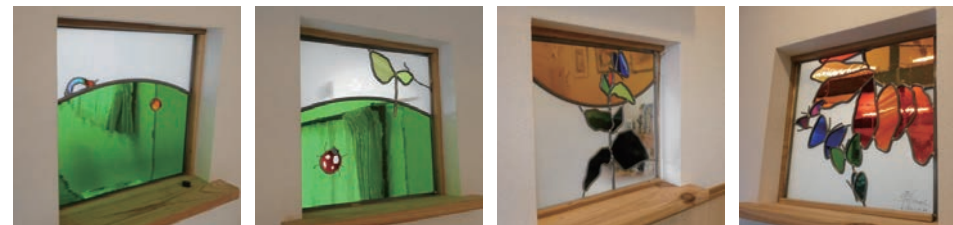
Heal the World 世界を癒そう

所長 水野 英尚

最近、小さなたねでのBGMで、マイケル・ジャクソンの「Heal the World」を女性ボーカルがカバーした曲が流れていましたので、少し懐かしくなつて原曲が聴きたくなり、YouTubeで聴いてみました。今更ではありますが、あらためてこの曲のすばらしさ、歌詞の意味の深さを知らされたような衝撃を受けました。

小さなたねに集う重い障がいのある一人一人の姿は、私たちに大きな癒しをもたらししてくれます。彼（女）たち自身は、けいれんや身体の変形などがあり、呼吸状態も不安定で常にしんどさを持ちながらの歩みですが、そんな彼（女）たちが見せる笑顔は、何よりもその周囲を明るくし、傷ついた心

a better place. (そこをより良くしよう!)と、何
 度も繰り返して歌われます。それは、ほんの些細な
 日常の中での取り組みの中から、大きな変化が始ま
 っていくことを示しています。



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねスタッフのつぶやき

つい先日、小さなたねを利用されている高校生の女の子と、好きな芸能人の話をする機会がありました。

その子は「とにかく明るい安村さん
がいい!」と、iPad^{アイパッド}を使って教え
てくれました。そして何度も、モノマ
ネをみんなの前で披露してくれました

私が「明るい安村さんのあの肉厚さ
が好きなの？」と尋ねる
と、「そうだよ!」との
返事。お昼にステーキを
ほおばっている彼女を見
て、「今時の女子高生は
肉食だなあ」と思うひと
時でした。

(深町佳那(介護職))



（深町佳那 〔介護職〕）



後記

息子（重心）の定番朝食は好物のトースト。半年前、壊れたオープンを買って替えたなら、トーストに予熱が10分必要という。は!? そんなに待てないよ。というわけでガスコンロのグリルを使う。おかげで忙しい朝がさらにスリリングになった。ハッと気づくと黒焦げ。横に剥ぐと5枚切は10枚切の薄さに。どうせならと4枚切にしたら、火に近いぶん余計に焦げた。家族は私の悲鳴にも慣れ、上手く焼けると高揚感もあるが、くたびれるし、何より勿体ない。よし新学期、トースターを買おう！（E）

医療法人にのさかクリニック

地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3

電話 092 - 874 - 3051 FAX 092 - 874 - 3052

E-mail : chisanatane@tune.ocn.ne.jp

立ち止まって、深呼吸

2011年3月11日午後2時46分、東日本を襲った大地震とその後の津波により、沿岸部は壊滅的な被害を受け、死者・行方不明者1万8455人という多くの犠牲者が出ました。また、津波の影響で福島第一原発はメルトダウンを起こし、漏れ出した放射性物質はその地域を飲み込んで、地域住民たちは避難生活を余儀なくされています。今なお収束のめどはたっていないません。

このような甚大な被害がもたらされたあの日、小さなたねでは開所に向けた改装工事も終了し、私は電話で内装についてのやり取りをしていました。「大変な事が起こっているから、すぐにテレビを見て！」という言葉に目をやる、そこに映し出されたのは、事実を疑いたくなるような光景。私はただただ呆然と画面に見入るばかりありませんでした。

あれから5年、自分自身があの惨事を受けて何が出来たのかと問われたら、何も出来ないまま過ごしてきました。それでも、この出来事を心に留め、自らの暮らしや歩みに問いを投げかけてきたようにも思います。小さなたねの歩

み出しが、この国の大地を揺るがし、大きな力で全て破壊し、人々の哀しみや嘆き声が上がったその日であったことは、これからもずっと、想い起し続けていかなければならないのだと思います。

壊滅的な被害を受けた場所で、人々の暮らしに必用なライフラインを整備し、地域コミュニティを形成していくという町づくりは、「元通り」を目指したあり方ではなく、これからの歩みに向けた「未来」を目指したものとなるでしょう。ですから、そこに何をどのようにして復元し、何をもって興していこうとするのか、そこに日本が、いや世界が視線を注いでいます。

福島原発事故により避難生活を余儀なくされている方が、「私たちにとってはゼロからの出発ではなく、マイナスからの出発なんです」と語るように、目に見えない放射能汚染に苦しみ、安心して外出も出来ない人々の声もまた、これからの道程の長さを物語っています。

何とか希望の明日が見えるまで、「復興」の取組みに注視していくこともまた、私たちにとって大切な役割だと思います。官民が協働し、「被災者」と一括りにされない一人一人の個別な課題に向き合い、「伴走型の支援」が出来ていくことを心から願います。

旅先のびっくりポン



最近の私事です、海外旅行（イタリア・フランス）をしてまいりました。街並みや歴史的建造物の美しさ、壮大さに感動の連続でしたが、日常生活でびっくりポンな出来事を2つ記します。

1つ目は、地下鉄に乗った時の事、車内でバイオリンの演奏が始まりました。私たち以外の人たちは平静で、生演奏が終わると、差し出された紙コップに貨幣を入れる人、断わる人など各々でした。私はひとり得した気分になり、その後も歌やダンス等のパフォーマンスに、あちこちで会おう驚きと楽しみとなりました。

2つ目は、列車に乗る手続きが分からず戸惑っていたら、駅員さんのように丁寧に教える人が現われ、誘導して下さいました。ところが「〇〇ユーロ払ってくれ!!」と請求され、「そんなに払えない」としぶると、「これは仕事なんだ! もらえないとボクは生活できないんだ」と……。有難くあたたかい気持ちが一転、複雑な思いで支払いました。

旅行という短期間ですが、伝えたい気持ちが「伝わらない、表現できない」＝「理解してもらえない」状況で孤独感と不安が膨らみ、楽しさも十分味わえなくなるという経験もしました。今更ですが、表現方法が豊かな人、少ない人、色々な方々の想いを少しでも多く汲み取って寄り添いたい、そんな気持ちを思い起こさせてくれる旅となりました。



「在宅ホスピスフェスタ 2016」

主催：福岡県、ふくおか在宅ホスピスをすすめる会

3月20日、「在宅ホスピスフェスタ2016」がアクロス福岡交流ギャラリーで開催され、小さなたねの取組みをポスターにして展示しました。「在宅ホスピス」の広がりの中に、私たちもあることを実感します。



ほっこり

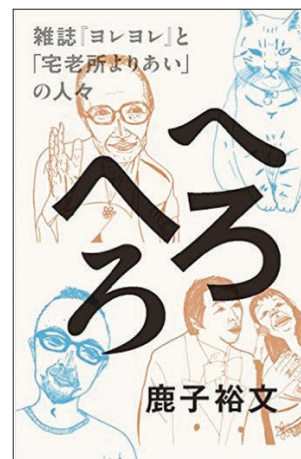
小さなたねの ひ・と・こ・ま



本の紹介

『へろへろ』

雑誌『ヨレヨレ』と
「宅老所よりあい」の人々



鹿子 裕文 著
(ナナロク社、1500円＋税)

「宅老所よりあい」の取組みはいつも、何だか輝いて見えます。また、表現が面白い。雑誌「ヨレヨレ」から、今度は「へろへろ」なんて、つい手に取って読みたくなってしまう魅力があります。また、「モンドくん」の挿画が、実に人間味溢れ味わいがある。
「介護」も「福祉」も「医療」も全て、行く着く先は「人の魅力」だなと思わされます。

『「新しい人」の方へ』

ノーベル文学賞受賞作家の大江健三郎氏が中高生向けに書かれたものですが、大人が読んでも十分に読み応えがあります。

「報復」という名の暴力連鎖が止まらない世界で、私たちの歩みべき指針を、どうしたらよいのか？ そんな課題を、穏やかに示してくれる一冊です。



大江健三郎 著／大江ゆかり 画
(朝日文庫、600円＋税)

さわら地域 チャリティひろば 春のバザー

主催：さわらチャリティひろば実行委員会
共催：Bangladeshと手をつなぐ会
にのさかクリニック



2016年4月24日(日)

12:00~14:00

にのさかクリニック駐車場にて

※バザーへの提供品は、にのさかクリニック
(092-872-1136) までご一報下さい。

小さなたねのブースでは、たねうどん、の販売を予定。
皆さまのお越しをお待ちしていまーす!

原発事故被災者の「マイナスからの出発」という言葉は、
経済成長を常に優先させ「安全神話」を鵜呑みにしてきた
私たちに、重い課題を突き付けてきます。未来を担う子ど
もたちへ大きな代償を課しながら、このまま先送りにして
おいて良いのかと思います。当たり前の暮らしを取り戻す
ために、何を優先すべきなのでしょう。

*

翻って、生まれながら重い障がいを負って生きる彼
(女)たちは、ごく当たり前に繰り返し返さ
れるべき呼吸や心臓の鼓動さえ、しん
どさや困難さを常に感じています。自
らの指一本でさえ、動かすことが出来
ません。思い通りに身体を動かせるこ
とが出来て当然、呼吸していることが
当たり前というのが、実はそうではない
ということ、そんな彼(女)たちの
姿から教わります。

障がいの重さゆえ失われてしまった
機能を取り戻すことは困難です。しか
し、その現実を受けとめながら日々生
きている彼(女)たち、そのような状



大船に乗ったつもり……?

況の中で恨み辛みを吐き出すことなく、時折見せてくれ
る笑顔は実にけなげです。そして、与えられた場所で根
を張り、美しい花を咲かせる野の花のように、しなやか
で凜とした生き方は、どんな逆境の中にあっても、自ら
を生きることをあきらめない姿です。たとえ「マイナス
からの出発」であっても、一歩一歩を進んでいく力強さ
を感じます。私は、そんな彼(女)たちに「伴走」しな
がらより良い暮らしをめざし続けて行くことが、誰もが
安心して暮らせる町づくりへ繋がってい

くのだと信じています。

日々ネット上に溢れるあらゆる情報は、
瞬時に私たちの手元に届き、喜びや悲し
みの出来事が風のように駆け足で過ぎて
いきます。感情が追いつかず、思考停止
に陥ってしまいくらいです。「人が人をケ
アする」という福祉サービスでさえ、効
率化や利益優先の市場原理の波が押し寄
せてきています。

立ち止まり、深呼吸してから、さあ、
次の一歩へ!